

(論文内容の要旨)「二つの表層—皮膚感覚と絵画」

後期博士課程美術専攻
油画研究領域(油画技法・材料)3年
学籍番号 1322909 川端健太

本論文は、現代社会における視覚体験と身体性の変容を背景に、「皮膚感覚」という視点から現代における絵画について再考する制作論である。皮膚感覚とは、痛覚や触覚といった物理的な感覚のみならず、恐怖や驚き、あるいはぬくもりといった、曖昧かつ多様な感覚を包含するものである。この皮膚感覚は、定量化や分類によって把握することが難しい性質を持つものの、身体性の喪失が進む現代のデジタル社会において、自己認識や身体性、表現行為を問い直す重要な鍵となりうると考えた。本論の目的は、この感覚を手がかりに、絵画の物質性と感覚性を再考し、その新たな意義を探る試みを行うことである。

デジタルメディアの浸透により、私たちの知覚様式は大きく変化しつつある。視覚情報は瞬時に共有・消費され、触れることのない画像や映像が溢れる一方で、身体的な経験や触覚的実感の価値は見過ごされがちである。こうした状況において、感覚器官の中でも最も直接的かつ原初的である皮膚感覚、そしてその感覚の場としての皮膚の役割は、重要性を増していると言える。皮膚触覚は「触れる-触れられる」や「見る-見られる」という相互作用を通じて、さまざまな両義性を含んでいる。「皮膚-自我」という概念を精神分析に導入したフランスの精神分析家、ディデエ・アンジューは、『皮膚-自我』の中で、皮膚が持つ両義性を、次のように述べている。「皮膚は透過性と不透過性を同時に持つ。また表層的であってかつ深層的である。真実を語るかと思えば人を欺く。絶えず 衰亡への道をたどりながら、再生を繰り返す。柔軟な弾力性を持ちながら、全体から切り離された一部は大きく縮んでしまう。(中略)苦痛と喜びをも同時に与える」(『皮膚-自我』言叢社、1993年,p33)。

本論は、精神分析の視点から皮膚と心の関係を掘り下げたアンジューに注目しながら、皮膚感覚の基盤となる「皮膚」と視覚芸術としての「絵画」という二つの表層を相互に検討し、両者に共通する「痕跡を保持する記録媒体としての性質」と「内部と外部を隔てる境界としての機能」という二点を基盤に、現代における絵画の意義を再定義する。

また本論では、皮膚感覚とその基盤となる「皮膚」をより精密に扱うために、便宜的に「物理的皮膚感覚」と「心理的皮膚感覚」の二つに区別して論じる。この区別は、実際には両者が不可分であり明確に分離できないという前提に立ちながら、分析上の整理として導入する。心理的皮膚感覚は恐怖・羞恥・安心・拒絶・温もり、あるいは「見られる」「触れられている」といった情動的な反応や象徴的意味の領域。美術史における皮膚表象、身体性、アイデンティティの問題もここに含まれる。一方、物理的皮膚感覚は温度・湿度・圧力・痛覚・触覚など外部環境との直接的な接触を扱う領域。絵画においては、マチエール、光沢、絵肌の変化、支持体の反応、さらには環境要因による表面変容(乾燥・湿度・亀裂・白化など)が対応する。

ここで問題となるのは、絵画の歴史において皮膚の概念がどのように位置づけられてきたかである。皮膚の表象は古代より継続的に視覚文化において重要な役割を担ってきた。主題そのものというよりも、主題を現前させるための表層として扱われ、その表面の質や扱われ方が主題の意味を左右してきた。古代ギリシャでは、絵画術と化粧術がしばしば重ねて理解され、身体表面を理想化し修飾する技法として共通の体系に置かれていた。中世宗教画においては、皮膚の色や質感が象徴的意味を担い、神学的概念を視覚的に伝達する重要な媒体となった。さらに近代以降の美術では、皮膚は物質性・身体性・アイデンティティの問題と結びつき、多様な解釈を生み出してきた。そして現代美術における人種・ジェンダー・社会的属性をめぐる議論の表象としての皮膚など、扱われ方は時代とともに変容しながらも、主題を可視化し、意味を媒介する表層として再登場している。このように、皮膚は歴史的文脈ごとに異なる役割を担いながらも、身体と世界、精神と物質、個人と社会をつなぐ境界として、視覚表現の根幹に関わる主題の表面として反復され続けてきたことが理解できる。

さらに本論では、絵画の物質性であるマチエールと絵具の物理的な層構造にも注目し、触覚的な経験と視覚体験の結びつきを探った。1950年代以降に誕生したアクリル絵の具に焦点を当て、絵画表面に起きる現象のひとつとして、温度や湿度など環境の影響によって発生するブルーミング現象（白化現象）についても実験し分析した。この現象は、皮膚が外部環境と相互作用して変化するように、絵画層も環境条件を反映しその物質的性質が変化することを示すものであり、皮膚感覚と絵画の物質性の繋がりを象徴するものと捉えることができる。

本論文は以下の章に分けられる。各章の内容を簡単に紹介する。

第一章では多様な「皮膚感覚」の特性や役割を整理し、皮膚感覚を「物理的皮膚感覚（触覚・痛覚・温感など）」と「心理的皮膚感覚（恐怖・安心感・温もりなど）」に便宜的に区別し、その特徴と絵画との関係を整理する。ただし両者は本来的に相互作用しており、独立した概念ではないことを確認した上で議論を進める。

第二章では、心理的皮膚感覚として、古代ギリシャの化粧術、中世宗教画における皮膚の象徴性、近現代美術における皮膚表現を取り上げ、心理的皮膚感覚がいかに美術史の中で表象されてきたかを検討する。皮膚の色・質感・傷・透明性などが、宗教的・社会的・象徴的意味を帯びて描かれてきた点を分析する。

第三章では、物理的皮膚感覚に注目し絵画表面の物質性と触覚的経験の関係を考察する。マチエール、絵具層の構造、支持体の性質が視覚と触覚の相互作用をどのように生むのかを分析する。特にアクリル絵具に生じるブルーミング（白化）現象を実験的に観察し、絵画表面が環境要因（湿度・温度など）に応答して変容する表面であることを明らかにする。

第四章では、第一章から三章の考察を踏まえ、筆者自身の制作実践を検証する。博士審査展提出作品では、皮膚の脆弱性が身体的および社会的な経験に与える影響を考察するために表皮水疱症患者の取材と、皮膚の制度化を象徴するパスポート写真という対照的な二つを主題とした。これらは皮膚を介して個人の存在と社会的制度の関係を問うものであり、皮膚感覚を軸とした絵画の可能性を実践的に示す。